

第49回城戸賞応募作品

シュレディンガーの恋人たち

キイダタオ

あらすじ

朱本月星（ルイ）は、ある日物理学者の空賀響子から、宇宙が消滅の危機にあると告げられる。それを防ぐには3日以内にある猫を探し出すことが必要で、手掛かりはルイと10年前に突然消えた大学の同級生、蒼井星月（シヅキ）の共通の過去にあるという。猫の正体は多元宇宙間を移動して混乱を引き起こす暗黒物質であり、そのせいで2つの宇宙が重なったために、本来別々の宇宙に存在していた2人が出会うことになったのだった。ルイは響子の指示で次元の交差点に向かい、シヅキと再会を果たす。そして2人は世界を救うため、過去を辿りながら思い出の場所を巡り、猫探しを開始する。だがその過程でルイは、自分がシヅキに対して友情以上の感情を持っていたことを自覚していく。しかし2人が再会できたのは、友達以上恋人未満という関係性が量子力学における不確定性原理と結びついたためで、関係が確定するとシヅキがまた消えてしまうというジレンマが存在した。

一方シヅキは世界を救う気がなさそうに見え、ルイは苛立ち、遂には喧嘩になる。だが実はシヅキが心の傷を抱えて生きてきたことが判明する。そしてルイ自身も人生がうまくいっていなかった。あの頃夢見ていたような未来を手にすることができずに苦しんでいた2人は、もしも世界を救ったところでまた元の生活に戻るのなら、終わってしまうのも悪くないかもしれないと使命を投げ出し、しばし懐かしい遊びにふける。だが楽しかった過去に触れるにつれて、宇宙が消滅し、大切な思い出すらも永遠に失われることを悲しく思い、2人は再び世界を救う決意をし、搜索を再開。だが猫は見つからず、時間は刻々と迫

る。猫の影響で異常現象も多発するようになる。そして遂にルイは猫の居場所を探し当てるが、捕まえるにはシヅキに恋していたことを告げなければいけない事実突き当たる。苦悩の結果ルイは世界を救うがシヅキは消えてしまい、絶望、空虚な日常に戻る。だがシヅキに再会したいという強い思いが捨てきれない。そんな彼に対して響子は一つだけ彼女と繋がる方法があると打ち明ける。それはある手段を使って宇宙間で量子もつれという現象を起こすことだった。だが失敗すれば、ルイはシヅキに関する記憶を全て失うという大きなリスクがあった。

それでもルイは全てを賭けて実行し、遂に奇跡を起こす。そして2人は宇宙を隔てて繋がり合いながら、別々の世界で生きていくことになる。

登場人物

朱本月星（ルイ）（19）（29）喫茶店店員

蒼井星月（シヅキ）（19）（29）ルイの同級生

空賀響子（45）物理学者

キム・ドユン（38）研究者

細田重幸（60）喫茶店オーナー

前村博人（22）シヅキの先輩

エド・ブラウン（40）大学講師

ルイの母親

黒人男性

教授

男子AとC

美容師

タクシードライバー

○海辺（夜）

星が綺麗な夜。暗く静かな岩場に座り、どこか遠い目で海を眺めている蒼井星月（シヅキ）（19）の横顔。アッシュグレイのボブヘアで、赤いチェリー型の大きなイヤリングをしている。
ルイM「朝が来る度に、一日、また一日と、あの頃が遠ざかっていく」

○井の頭公園（夜）

池の側の道。疲れた表情の朱本月星（ルイ）（29）が歩いている。
ルイM「散りばめられていた幾千もの瞬間が、だんだんと一塊の朧げな記憶へと変わっていきそうだ」

ルイが空を見上げると、星が瞬いている。
× × ×

（フラッシュ）ルイ（19）とシヅキ（19）が夜の公園で星を見ている。

シヅキ「ルイはさ、流れ星の音って聞いたことある？」

ルイ「流れ星って、音あるの？」

シヅキ「電磁波音って行ってね、たまに聞こえるんだって」

シヅキ、ルイの方を見て楽しそうに

シヅキ「今度、山奥の静かな所に行こうよ。」

先に聞こえた方が勝ち」

ルイ、微笑んで頷く。

ルイM「翌日、彼女は消えてしまった。初めてからいなかったみたい」

シヅキ、目を閉じて大きく両手を広げる。

ルイ「何やってんの？」

シヅキ「星の波動を受け止めるの」

シヅキを見て微笑むルイ。

ルイM「蒼井星月、誰もその名を覚えていない。だから僕は、彼女を忘れられない。忘れたくない」

× × ×

井の頭公園。ルイが懐かしむような表情で星を見上げている。

ルイM「僕だけ、長い夢を見ていたのだろうか？」

ルイ、目を閉じて両手を広げる。

ルイM「まどろんでいた僕の顔を、シヅキは形而上的な存在として、静かに通り過ぎていっただけなのだろうか」

カップルがルイを怪訝な目で見てひそひそ話をしながら通り過ぎていく。

○真っ暗な画面。

波音だけが聞こえる。

ルイM「甘美な思い出だけを、僅かに残して」

○T『シュレディンガーの恋人たち』

○ルイの部屋（朝）

ワンルームマンションの一室。整頓されているが、本棚周りだけは大量の本で散らかっている。

ルイが寝ていると、スマホのアラームと2つの目覚まし時計が同時に鳴る。

ルイ、気怠そうに全てを止める。スマホのアラームを止めた際、2019年11月1日午前9時の表示が出る。

○通り

信号を待ちながらスマホでSNSを見ているルイ。結婚式で新郎新婦を囲んでいるしゃいである同級生の写真が表示され「久々に英文男子全員集合」とコメントが添えられている。

ルイ「（小声）呼ばれてねえし……」

ルイ、コメント欄に中指を立てた絵文字を3つ入力し、すぐに消す。

○武蔵堂珈琲・店内

年季の入った老舗の喫茶店。ルイが白シヤツにブラックベストを着てバックヤードからフロアに入ってくる。

細田重幸（60）と空賀響子（45）が

話で盛り上がっている様子。

ルイ「おはようございます」

細田「朱本くん、こちら空賀響子さん。東大の物理の先生だって」

響子「正確には素粒子物理学。昔は天体物理学を研究してたんだけど」

ルイ「すごいですね。僕理系はサッパリで」

細田「そうだ、じゃあ何か物理学の面白い話してくださいよ」

響子「じゃあ、このミルクを熱いコーヒーに注ぎます。一瞬でミルクはコーヒーと混ざり、液体の温度を均一にします」

響子、ルイを一瞥してから目の前のブラックコーヒーにミルクを入れて

響子「エネルギーはより均等な状態になるようにいつも流れる。そして一度ミルクとコーヒーが混ざったら、2つを完全に元の状態に戻すのは不可能」

ルイがはっとして呟く。

ルイ「あっ、熱力学第二法則ですね。エントロピーは常に増大する」

細田「おー、理系はサッパリって言ったのに」

ルイ「僕はそうなんですけど、昔……そういう話が好きな奴がいて」

響子、ルイをじっと見て

響子「その人、突然消えちゃったでしょ？」

ルイ「(虚を突かれたように)へ？」

響子「……そして誰も覚えてない」

ルイ「……何で、知ってるんですか？」

響子「マスター。ちよーつとだけ、外してくれる？」

× × ×

時間経過。

響子「単刀直入に言うね。ある特別な猫を探してほしいの。見つからなければこの宇宙は3日後の正午に消滅する」

ルイ「(ポカンとして)は？」

響子「そしてその猫を見つけることができるのは朱本ルイ君、あなただけ。いや、あな

たと、蒼井シヅキさんの2人」

ルイ「……シヅキ」

響子「私達は量子猫と呼んでね、人間には猫に見えるんだけど正体は暗黒物質、所謂ダークマターってやつ」

ルイ「えっと、あの……」

響子「それは特定の条件下で安定性を欠くとブラックホールが発生して、この宇宙を丸ごと飲みこんで……」

ルイ「ちょ、ちょっと待ってください」

響子「多元宇宙論とか量子力学の話は難しいかな？」

ルイ「いや、そういうことじゃなくて。シヅキは、僕しか……」

響子「2009年。大学時代にあなたは蒼井星月という同級生がいたと主張した。けれども彼女の記録はどこにも存在せず、誰も彼女を覚えていない。あなたは統合失調症であると診断を受けた」

ルイ「ちょっ……何なんですか」

ルイの表情が青ざめ、絶句している。

響子「私達は全部知ってる。あなたに協力してほしい」

ルイ、突然笑い出す。

ルイ「治ったと思っただのに。あー、わかりました。あれですネ、あなたは存在しない。僕の妄想だ！」

響子、ルイの腕をつねる。

ルイ「痛っ」

響子「大丈夫、妄想じゃない。あなたは正常」

ルイ「そっか、わかった。医療記録でも盗み見たんだ。そういう詐欺ですか」

響子「(呆れた様子で) どういう詐欺よ」

ルイ、響子の前のコーヒーを取り下げる。

ルイ「帰ってください！ そういう話はね、吉祥寺ならもっと安いチェーンのカフェとかあるんでそっちでどうぞ」

響子「ねえ、話聞いてくれない？」

ルイ、大げさに出口を指して退店を促し
ルイ「謎の洗剤とか変なパワーストーンとか

魂が浄化される水とか、僕、そういうの買
うお金はありませんから。ただのバイトな
んで。残念でした！」

響子、ドアの方へ歩いていく。

響子「(溜息をつき)わかった。じゃあこれ
だけ言わせて、すぐに驚くことが起きる。
あなたはきっと信じる」

ルイ「あれですか、実はアメリカ大統領はト
カゲ人間ですかそういうやつですか」

響子、残念そうに首を横に振り、帰って
いく。

ルイ、ため息をつきながら、響子の飲み
残しが入ったコーヒーカップを見つめる。

ルイ「シヅキ……」

× × ×

(フラッシュ) 大学時代のルイとシヅキ
がレトロな喫茶店で話している様子。

シヅキ「(楽しそうに熱弁)だからさあ、こ
のコーヒーも椅子も私たちも、皆粒子であ
りながら波でもあって、観測されて初めて
どっちか決まるわけ。ヤバくない？ マジ
で宇宙アツすぎない？」

ルイ「(ポカンとして)……いや、マジで何
も聞いてもわからん」

シヅキ「もー、今ルイはね、世界の真実を聞
かされてんだよ？」

ルイ「いつも世界の真実の話してんじゃん」
シヅキ「(顔をしかめて)ウザー」

○ルイの部屋(朝)

寝起きのルイがスマホでネットニュース
を見ている。「宮益坂21、冠番組スタ
ート」という記事を見て驚くルイ。

ルイ「21!?!」

ルイ、検索エンジンで「宮益坂42」と
検索するが、「宮益坂21」というワー
ドしか出ない。

○井の頭公園

徐々に紅葉が深まりつつある公園。

池の中央に架かる橋を、吉祥寺駅方面に向かつて怪訝な表情のルイが渡っている。池沿いの木々が半周は桜が咲き、もう半周は紅葉になっている。人々はそれに特に驚いていない様子。

ルイ「え、桜！？ 紅葉！？」
立ち止まってオロオロしているルイ。

○通り

吉祥寺パルコ前の通り。混乱した様子のルイがキョロキョロしていると、通行人たちに混じって侍が歩いている。

ルイ「サムライ！？」

ルイ、驚いてふらつき、道路に飛び出す。ちょうどタウンエースのバンが通りかかり、急ブレーキで間一髪で止まる。倒れ込んで恐怖の表情で硬直しているルイ。キム・ドユン（38）が悪態をつきながら運転席から下りてくる。

ドユン「これも不確実性ですか？ 勘弁してくださいよ。日本の刑務所なんて」

助手席からは響子が下りてくる。

響子「あなたがお喋りしてるからでしょ」

ドユン「響子さんがいつも俳優の名前間違えるからですよ」

響子「悪かったわね。最近の若い子皆同じ顔に見えるのよ」

響子、ルイに駆け寄って

響子「大丈夫？ ケガは？」

ルイ「桜と……侍がいました」

響子「じゃあ大丈夫ね」

ルイ「は？」

響子「色々説明するから、乗って」

ルイが怪訝な顔をする。

響子「詐欺じゃないから！」

○バン・車内

都心に向かつて大通りを走行中の車内。

ドユンが運転し、後部座席にルイと響子が並んで座っている。車内には様々な機

材が置かれている。

ドユン、運転しながら流暢な日本語で
ドユン「さっきは失礼。キム・ドユンです。

響子さんのお手伝いをしてます」

ルイ「ど、どうも。日本語お上手ですね」

ドユン「宮崎駿さんが大好きなので。彼の映画で勉強しました。プリンセスモノノケ、100回ぐらい観てます。サンは僕の初恋の人で……」

響子、ドユンを遮るように

響子「ドユンはMIT時代からの仲間なの。

こう見えてソウル大の情報科学のプロフェッショナル」

ルイ「は、はあ……」

響子「ごめんね、実はルイ君のことはドユンに色々調べてもらったの」

ドユン、笑いながら

ドユン「ヤバイ手段も使っちゃったので、バレたらそれこそ日本のブタ箱でクサイ飯なんですけどね」

響子「(呆れて) それ笑って言う話じゃないから」

ドユン「でも僕たち、怪しい者違います。宇宙の危機を回避するため、極秘プロジェクトとして呼ばれました」

ルイ「いやそれ、まだ怪しいですけど……」
ドユン「政治利用されないよう、国家機関から独立した組織。有志である世界中の富豪や王族の資金提供で成り立っていて……」

響子「あのね、そういう話はいいの」

ドユン「すいません。お喋りクソ野郎でした」
ルイ「あの、侍とか、桜は……」

響子「量子猫の影響で時空連続体が壊れ始めてるの。こうしてる間にも暗黒物質を放出し続けて、最終的にはブラックホールが生まれ」

ルイ「頭、パンクしそう」

ドユン「でも一般相対性理論を実際に体験できる貴重なチャンスですよ」

響子「そういう不謹慎なことは言わない」

ルイ「……他の人たちは異変に気づいてない
みたいなんですけど」

響子「私たちはある意味、猫の存在を認識して
るから枠組みの外にいるの。だから異常現象を
認知できる。世界という枠組みの中にいる人は、
その認識ごと変えられてるか、異常を異常と
気づかない」

ルイ、首を傾げる。

ドユン「10年前にシヅキさんが消えた時も
同じです。ルイさん以外、誰も彼女を覚えて
ない。重なっていた2つの宇宙が戻った時、
それぞれは元の状態に戻り、ルイさん以外の人
たちの認識も元に戻ったからです」
ルイ「どういう意味ですか？ 2つの宇宙？」
響子「猫が現れたのは今回が初めてじゃない。
前回は2009年の9月から12月の期間にこの
宇宙に紛れ込んで、具体的に人間と接触した
形跡があるの」

響子、ルイの目を見て

響子「それがあなたとシヅキさん。この猫は
次元間のインターフェイスや宇宙を構成する
量子に影響を与えるから、あなたたちはその
余波によって引き寄せられたってわけ」
ルイ「は、はあ……」

ドユン「響子さん、そろそろランデヴーポイ
ントに行かないと」

響子「そうだった。ルイ君、シヅキさんと最
初に出会った場所はどこ？」

ルイ「えっと……大学です。熊澤大学」

響子「彼女との出会い、聞かせてもらえる？」

ルイ、虚を突かれた表情。

響子「詳細に。当時はよく思い出して」

ルイ「(困惑しつつも) 2年の後期の授業で
す。英語演習。1年の時の必修だったのに、
僕は落として再履修になってて」

○(回想・2009年)熊澤大学・外観

駒沢周辺にある大学。本降りの雨でキャン
パス内を多くの学生が傘を差して行き
交っている。

ルイの声「月曜の1限目なのに、担当のブラウン先生は出欠に厳しくて」

T『2009年 9月』

○同・教室

中規模の教室で女子学生が8割を占める授業を受けているルイ(19)。その後の席にはシヅキ(19)がアッシュグレイの髪を濡らした状態で座っている。髪色とチェリー型のイヤリングにより一際目立っている。

教壇では白人のエド・ブラウン(40)が英語で講義を行っている。

ブラウン「You have just concluded your first summer vacation as university students」

シヅキがルイの肩をそっと叩き、小声で話しかける。

シヅキ「ねえ、ブラウン先生何て？」

ブラウン「However, the summer break is now over. From now on, you must devote yourself to your studies once more」

ルイ「えーっと……君たちが素晴らしい夏休みを送ったことを願うよ。だが夏休みは終わりだ、勉強に戻ってもらおう」

シヅキ「お、君通訳いけるねえ」

ルイ、シヅキのタメ口が気になる様子でルイ「えっと……俺、一応2年なんだけど」

シヅキ「え、そうなの？ 私も！」

シヅキ、怪訝な表情になり

シヅキ「本当に同期？ 見たことないけど」
ルイ「本当だよ。こっちこそ見たことないけど。去年からその髪？」

シヅキ「大学入ってずっとこの色です」

ルイ「その色なら絶対見かけたら覚えてるはずだけど……」

ブラウン「I wish to maintain a profound seriousness when it comes to time and rules」

シヅキ、ルイの肩を叩いて訳せと合図。

ルイ「時間やルールには厳格でありたい」

シヅキ「(笑いながら)スネイプ先生風はや

つてみてよ」

ルイ「はあ。」

ブラウン「As adults, you must bear responsibility.
Be sure to be seated when the bell for the 9
o'clock class rings. Even a minor delay will be
considered as an absence」

シヅキ「ほらほら」

ルイ、咳払いで喉を整えて、吹替口調で
ルイ「ホグワーツの諸君、君たちは大人とし
て責任を持たなければならぬ。だから遅
刻は許さぬ。9時の授業のチャイムが鳴っ
た時、席についていなければ欠席と見なす」
シヅキが声を押し殺して笑い、ルイの肩
を叩く。

シヅキ「全然似てねー」

ブラウン、2人の方を見て顔をしかめる。

ブラウン「Do you have any questions?」

ルイ「(慌てて)ノ、ノー、ソーリー」

シヅキが尚も笑う。

前の席の女子がルイに出席名簿を回す。
ルイ、会釈してペンを手に名簿に目を移
す。「朱本月星」の横にチェックマーク
を付け、後ろのシヅキにそれを回そうと
してもう一度名簿を見る。ルイの名前の
上に「蒼井星月」とあり、驚いた顔でそ
れを指して

ルイ「蒼井……ほしつきさん？」

シヅキ「それでシヅキ。え、嘘。つきほし？」

ルイの声「僕は月に星でルイ、シヅキは星に
月。漢字で書くと僕らの名前はすごく紛ら
わしくて。しかも後でわかったのが、他に
も多くの共通点があることでした」

コソコソ喋っているとブラウンの視線を
感じ、慌てて黙る2人。

× ×

時間経過。授業が続いている。

ルイの声「2人とも1989年の11月11

日生まれ。福岡の博多の出身ということ。

シヅキは小2で千葉に越したそうなんです
けど。それとあと体質」

ルイの後ろでシヅキが爆睡し、イビキをかいている。

ルイ、ブラウンの方を見てハラハラしている様子。

ルイ「(小声でシヅキに)ねえ、ヤバイよ」

シヅキのイビキが大きくなり、ブラウンが顔をしかめてシヅキの方を見て咳払いする。

ルイ、慌ててシヅキの鼻を摘み、イビキを止める。シヅキがむせ返って咳き込む。

○(回想戻り)元のバン・車内

環七通りを走行中の車内。後部座席で少し和やかに話すルイと響子。

ルイ「変な奴でしょ」

響子「会いたい？」

ルイ「……え？」

響子「都内で観測中のマイクロ波の波動関数の予測値があと20分でピークに達する。

複数の次元がまた交差する前兆よ」

ルイ「どういうことですか？」

響子「とにかく、初めて彼女と出会った場所に行って」

○熊澤大学・外観

大勢の学生たちがキャンパスを歩いている。ルイが走って校舎に向かう。

○同・3号館・廊下

ルイが懐かしそうな表情をしつつ、キョロキョロと教室番号のプレートを見て歩く。昼休みのベルが鳴る。

× × × × × ×

(フラッシュ) 大学時代。809の教室からルイとシヅキが話しながら出る。

シヅキ「(文句)普通初対面の人の息止める

? 殺人未遂だよ」

ルイ「ごめん、先生が見てたから咄嗟に」

シヅキ「あれだ、衝動的に人殺すタイプ。ついカッとなってやりましたーってやつだ」

ルイ「いや、そもそも一発目の授業で爆睡するからじゃん」

シヅキ「だって昨日寝てないんだもん」

ルイ「あー出た、寝てない自慢ですか」

シヅキ「あのねえ、これマジで誰に言っても理解してもらえないんだけど。あたしね、低血圧なんですよ。それで朝起きれないの。だから寝ないで来たわけ」

ルイ、立ち止まって真顔で驚く

ルイ「……マジで？ 俺も低血圧。それで去年単位落とした」

シヅキ「うわー！ 仲間！」

ルイ「今日目覚まし5個かけて起きてきた」

シヅキ「あ、良いこと思いついた！ 低血圧再履修組同士、協力しようよ」

ルイ「協力？」

シヅキ「そう。月曜の朝7時、先に起きた方がモーニングコールするので、された方はコーヒーおごるの」

× × ×
現在。ルイが809の教室を発見。学生たちがゾロゾロと出てくる。

○同・教室

授業を終えた学生たちがガヤガヤと騒ぎながら教室から出て行っている。

教壇にはプリントの束。講師が首を鳴らしながら窓を開けている。

ルイが小走りで入ってくる。

窓から突風が吹き込み、カーテンが大きく捲れ上がり、更には教壇の大量のプリントが空中に舞い上がる。講師が慌てて駆け寄る。

その瞬間、ルイ以外の全てがスローモーションになり、徐々に止まる。

ルイ「（驚いて）え？」

ルイが固まっている学生たちや講師、空中で静止している大量の紙の間をくぐりながら教室の真ん中へ歩いていく。何もない空間が突然発光し、そこから勢

いよくシヅキ(29)が飛び出してくる。
髪型は黒のミディアムヘア。

激しくぶつかり2人とも床に倒れ込む。

ルイ・シヅキ「痛ってー」

倒れたままの2人、上半身を起こして見
つめ合う。数秒間の沈黙。そして驚いて
大声で同時に

ルイ「シヅキ！」

シヅキ「ルイ！」

その瞬間時間が再び動き出し、舞い上が
っていたプリントが一斉に床に落ち、講
師や学生たちも動き出す。

シヅキ、ハイテンションでルイに抱きつ
く。

シヅキ「ルイルイー！ 久しぶりー！ やっ
たやったやったー！」

ルイ、啞然としている。

シヅキ「全然変わってないじゃん！」

周囲が2人を怪訝な目で見ている。

ルイ、呆然としたまま呟く。

ルイ「……髪が、黒い」

シヅキ「(笑いながら)それだけかい！」

シヅキがルイの肩を掴んで揺らし、楽し
そうに笑う一方でルイの目が少し潤む。

○同・階段

階段を下りながら話しているルイとシヅ
キ。

シヅキ「でも、ほんとビビったよ。急に消え
ちゃうんだもん。皆にルイのこと聞いても
誰？ って言われるし、携帯の連絡先も消
えてるし」

ルイ「(驚いた様子)シヅキも？」

シヅキ「ルイそのへん何も聞いてないの？」

猫のせいで2つの宇宙が重なって、それで
うちらは出会ったって話」

ルイ「変な物理学者の先生がいきなり現れて
世界を救えって言ってきたり？」

シヅキ「それだよ。じゃあそっちでも同じこ
とが起きてるはず」

ルイ「あんまり詳しくは聞いてない。ていうか話入ってこなくてさ」

シヅキ「相変わらずだねー。あのね、私とルイは本来別々の宇宙に住んでて、その2つの宇宙が10年前に猫のせいで重なって、それでたまたま出会ったんだってよ。SFとかであるじゃん、多元宇宙論。あれが結果的に正しかったってことみたいでさ」

ルイ「ほお……」

シヅキ「厳密に言うると、不確定性原理が働いて、量子重ね合わせが起きたことで私とルイが同一空間上に存在してるっていう状態が出来上がってるんだって」

ルイ「……ごめん、日本語で説明して」

シヅキ「(呆れて)マジでルイ変わってないわー」

○同・キャンパス

懐かしそうに周囲を見ながら歩いているルイとシヅキ。

シヅキ「(はしゃいで)だけど、意外と変わってないね。教室の感じとか」

ルイ「ちよつと、安心したね」

シヅキ「ルイは、この10年元気してた？」

ルイ「一瞬言葉に詰まるが、笑顔を作りルイ「うん、どうにかやってる。保険会社でね、営業やってる」

シヅキ「えー、嘘。ルイが営業とかイメージないわー。体育会系ノリみたいな絶対無理そうなのに」

ルイ、ギクリとした表情になりつつ取り繕う。

ルイ「10年あれば人は変わるんですうー」

シヅキ「ていうかもうすぐ30とかヤバくない？」

あと10日ないじゃん」

ルイ「(物憂げに含みのある口調で) 20代

……何だったんだろうなあ」

シヅキ「どういう意味？」

ルイ「あ、いや、別に。こっから40までの10年ってもっと早いんだろうなーって」

シヅキ「ジャーネーの法則って言うんだよ。あの時期における時間の心理的長さは年齢に反比例する。若い頃と比べて、歳をとった方が時間の流れが早く感じる」

ルイ、楽しそうに早口で知識を披露する。シヅキを懐かしそうな表情で見る。

ルイ「相変わらず、シヅキはシヅキだなあ」

シヅキ「成長してないって意味かコラ？」

ルイ「違うよお」

2人が昔のやり取りのように笑い合う。

ルイ「シヅキはどうだった？ この10年」

シヅキ「私は……」

突然2人のスマホが同時に鳴る。

ぎよっとした顔でそれぞれの電話に出る

2人。

ルイの電話相手は響子。

響子の声「さっきの所に路駐してるから来て、

一人で。色々説明するから」

ルイ「シヅキとは別でってことですか？」

響子の声「シヅキさんには、あっちの宇宙の

私たちがいるから」

ルイ、同様に電話中のシヅキを見る。

響子の声「だから私たちが彼女に接触すると、

矛盾が生じて対消滅が起きる可能性がある」

ルイ「……と、とにかくダメってことですね」

○バン・車内

路駐した車の中でルイ、響子、ドユンが話す。

響子「シヅキさんから何か聞いた？」

ルイ「僕らが別々の宇宙の人間だって……」

響子「じゃあ話が早い。そういう訳で、今ま

た2つの並行宇宙が重なって、それでさっ

きあなたたちは再会したの」

ルイ「シヅキがこの宇宙に入ってきたってことですか？」

響子「ちよっと違う。正しくは……」

響子、側にあるノートの白紙ページを2枚切り取り、ペンでそれぞれに○と×を描く。

響子「あなたとシヅキさんの、別々の宇宙がある。恐らくとっても似通った2つの宇宙。2人に共通点が多いのは、この宇宙におけるルイ君のポジションに、あっちではシヅキさんがいるから。それが……」

響子、2枚の紙を重ねる。紙が透けて○と×が真ん中に見える。

響子「こんな風に重なっている状態が今。猫が放つ暗黒物質が次元間のレイヤーに歪を与えたからこんなことになってる」

ルイ「だから同じ空間にいると？」

響子「これが2009年に起きた。そしてある日突然シヅキさんは消えちゃった、でしょ？」

ルイが頷く。響子、紙をまた別々に並べる。

響子「それは再び量子のバランスが変わって、並行宇宙の重なりが解消されたから」
ルイ「なるほど」

響子「でね、今また同じことが起きてる。その特殊性を成立させているのが、あなたとシヅキさんの関係性」

ルイ「関係性？」

響子「シヅキさんのこと、女性として好き？」

それともただの友達？」

ルイ「(狼狽えて)え、シヅキは……」

響子、慌ててルイの口を塞ぐ。

響子「あ、ダメ。言わないで！」

ルイ、困惑の表情。

響子「10年前、あなたたちは出会って交流した。けれども極めて曖昧な関係性のまま離れることになった。そのため『観測』もされず、『確定』が起きなかった」

ルイ「何ですかその観測とか、確定って？」

響子、紙にシュレディンガー方程式を書き込む。

響子「量子力学における、量子重ね合わせという状態があってね」

ルイは首を傾げる。

響子「シュレディンガーの猫って聞いたこと

ない？」

× × ×

(フラッシュ) 大学時代のルイとシヅキがカフェで勉強道具を広げて話している。ルイの声「そういえば、昔シヅキが面白がって……」

シヅキ「(驚いた表情) 聞いたことないの？」

シュレインガーの猫」

ルイ、首を横に振る。

シヅキ、消しゴムを手に取り

シヅキ「じゃあこれが猫だとするね。仮に50%の確率で毒ガスが出る装置があるとしても。で、猫をその箱の中に入れる」

シヅキ、消しゴムの上に空のカップを被せる。

シヅキ「蓋をした状態。さて、この猫は生きてるか死んでるか、どっちでしょう？」

ルイ「それは……わかんないね」

シヅキ「正解はその両方。蓋を開けて中を確認するまでは、生きてる猫と死んでる猫、2つの状態があるって話。面白いですよ？」

ルイ「……どうということ？」

シヅキ「(呆れて) いや、分かれよ」

× × ×

神妙な顔で響子の話を聞いているルイ。

響子「あなたとシヅキさんはいわばそのシュ

レインガーの猫のような状態なのではないかというのが私の仮説。重なった宇宙が箱になって、未確定な状態だから一緒にいられる」

ルイ「てことは」

響子「だから、もしもどちらかが2人の関係性を決定づける言葉を伝えたり、相手に対してどう思っているかを具体的に形にすると、その瞬間に『確定』して、お互いに相手の宇宙から消えて二度と会えなくなる」ドヨン「つまりは友達以上恋人未満という関係をキープしてください。ノー告白、ノーキス、そしてオフコース、ノーセックス。オーケーですか？」

ルイ「オ、オーケー……」

響子「並行宇宙って言うのはね、思ってるよりもお互いに近い所で絶妙に触れ合うように存在してるのよ。あなたたちは宇宙と宇宙が交差する、その波打際に立ってるようなものなの」

ルイ「はあ……」

響子「それと同じ理屈で、あなたたち2人は10年前にどこかでその猫と遭遇してる。

だからその同じ場所に行き、猫を観測して、その量子状態を確定させる必要がある」

ルイ「……つまり、僕とシヅキで昔の記憶を辿って、2人で猫に触れたことがないか思いついて出せってことですね？」

響子「そう。そしてその場所に行って、猫が見つければ任務完了。簡単でしょ？」

ルイ「(考え込んで)猫と遊んだことなんてあつたかなあ……」

響子「それを2人で話し合って思い出すの。(ルイに降車を促す)ほら、明日の正午までだからあんまり時間ないよ。さあ、行つた行つた」

ルイ、訝しげな顔で車を下りながら
ルイ「あの。猫を見つけたら……シヅキもまた、消えてしまうんですか？」

響子、少し黙ってから微笑み

響子「それは別問題だから。関係性を確定させないように彼女と接すれば大丈夫。安心して世界を救って」

ルイ「わかりました……行ってきます」

ルイがドアを閉め、小走りで大学の方へ去っていく。

○熊澤大学・正門前

門の前でシヅキが待っていたところにルイが駆け付ける。

シヅキ「猫とかさー、そんなん覚えてるわけなくない？ 10年だよ？」

ルイ「とりあえず、馴染のある場所は？」

シヅキ「大学内？」

ルイ「学食は？」

○同・学食

学生たちが食事したり、談笑したりして賑やかな食堂内。

ルイとシヅキがそれぞれテーブルの下を覗き込んで見て回っており、学生たちが怪訝な顔をしている。

シヅキ「猫やーい」

ルイ、シヅキの側に行つて

ルイ「せめて落とし物探してるフリしなよ。完全にヤバい奴じゃん」

シヅキ「寄ってくるかもしれないじゃん」

ルイが辺りを見回すと、隅の席で紙パックジュースを飲みながら談笑している2人の男女がいる。

ルイ、その2人の学生を見つめる。

○（回想・2009年）同

同じ隅の席でルイとシヅキが紙パックジュースを飲みながら話している。

シヅキ「（ガラケーを操作しながら）mixiやってる？」

ルイ「あー、一応。月星ルイって名前」

シヅキ、ガラケーを操作して見つけた様子で

シヅキ「これか。ずっと放置してるじゃん。退会しないの？」

ルイ「マイミクが映画同好会の人ばっかでき、半年で辞めたから退会しづらいんだよ」

シヅキ「いや、辞めたなら退会してもいいじゃん」

ルイ「退会したのバレたら思われるじゃん、

あ、あいつmixiやめたって。せっかく消えたのにまたあの人たちの意識に上るじゃん。それで飲み会で言われるんだよ、リアル君mixiやめたよって。俺は空気になっときたいの」

シヅキ「（笑う）バカだねえ、向こうはそんなのいちいち気にしてるわけないじゃん。」

ていうかりアル君って何？」

ルイ「新歓の自己紹介で好きな映画監督は溝口健二とタルコフスキーって言ったら、うわーリアル映画好きの面倒臭い奴きたって空気になったんだよ。あの人たちただの飲みサーだったわけ」

シヅキ「君、見た目普通なのに変なヤツだねえ」

ルイ「蒼井さんにだけは言われたくないわ」
シヅキ「ていうかシヅキでいいよ、ルイ」

ルイ「(若干どぎまぎしながら) え？ ああ、うん。シヅ……」

そこに突然前村博人(22)がシヅキの肩を叩く。

前村「おーシヅキ、元気？」

シヅキ、少し驚いた様子で若干声の調子
を上げて

シヅキ「あー博人さん。お疲れ様です」

前村、ルイをちらりと見てからシヅキに
前村「今度飯でも行こうよ。恵比寿でいい感じの店見つけたからさ」

シヅキ「めっちゃ行きたいですー。暇人なん
でいつでも！」

前村「じゃあまた連絡するわ。んじゃ」

前村、手を振って立ち去る。シヅキ、笑
顔で会釈。

ルイ、自然に振る舞うよう努めて

ルイ「……先輩？」

シヅキ「放送研の時の先輩。1年の時可愛が
ってくれたの。まあ辞めちゃったから若干
気まずいんだけどねー」

ルイ「何で辞めたの？」

シヅキ「そっちも飲みサーだったんだよ。私
酒マジで飲めないのに。しかも女子アナ志
望の自己顕示欲の強い女ばっか」

ルイ「キツイねー」

シヅキ「で、ルイじゃないけどね、私もリア
ル君だったんだー。社会派ドキュメンタリ
ー作りたかったんだけどね」

ルイ「へー、意外」

シヅキ「で、唯一いいじゃんって言ってくれたのがさっきの博人さんだったわけ」

ルイ「(無関心を装う)へー」

シヅキ「それに博人さんTV局にも内定もらってるし、政治とかも色々詳しいから尊敬してるんだ。しかもお洒落でカッコいいでしょ？」

ルイ「(余裕を感じさせようとする口調)あ

あ……うん。まあね」

× ×

へアサロンでケープをかけてもらっているルイ。

ルイ「あの、めっちゃくちゃお洒落でカッコいい感じにしてください」

美容師「(困惑気味に)は、はあ……」

○(回想戻り)元の熊澤大学・学食

ボーっとしているルイにシヅキが

シヅキ「ねえ、ルイ？」

ルイ「あ、ごめん」

シヅキ「とりあえず懐かしい場所でも見に行かない？ 思い出すかもしれないし」

ルイ「う、うん」

○用賀駅周辺の風景

○アパート・廊下

単身者向けのアパートの廊下。

ルイとシヅキが部屋の前に立っている。

ルイ「何でそれが昔の俺ん家なわけ？」

シヅキ「いいじゃん、懐かしいでしょ」

シヅキ、チャイムを鳴らす。

ルイ「(慌てて)あ、バカ！」

中から体格の良い黒人男性が出てくる。

首元に大きなタトゥーが入っている。

男性「Who is it？」

シヅキとルイ、焦った様子。

ルイ「えー……I used to live...here」

男性「(怪訝な顔) So what？」

シヅキ「あー……We are looking for a cat. That

poses a cosmic crisis. Have you seen that?」

男性「眉をひそめて

男性「...what!?!」

○通り

シヅキは爆笑、ルイは不満げな顔で歩いている。

ルイ「ふざけんなよ。ビビったわー」

シヅキ「考えたら家に猫いるわけないよねー」

ルイ「ていうかシヅキ英語喋れるじゃん」

シヅキ「え、何で？ そりゃ英文科だよ」

ルイ「だってほら、最初ブラウン先生の説明
何もわかってなかったし」

シヅキ「あー...あれだよ、ルイ消えて通訳
いなくなつたから、勉強したんだよ」

ルイ「ほえー」

シヅキ「ていうかもうわかんない。手がかり
もないじゃん」

ルイ「だけど、たぶん何かしら重要な出来事
に関係してる気がするんだよね」

シヅキ「(ルイの目をじっと見つめて) 重要
って、どんな？」

ルイ「それは...」

ルイ、モジモジして目を逸らし

ルイ「わかんないけど」

車道を挟んで反対側の道にベビーカーを
押す女性を通り、それを遠い目で見ると

シヅキ。

ルイ「シヅキ？」

シヅキ、ハッと我に帰り

シヅキ「あ、ごめん」

ルイ「あそこは？ 三茶の古い喫茶店」

○(回想・2009年)ルイの部屋(朝)

ワンルームのマンションの一室。ルイが
ベッドで眠っている。

7時になり、ベッド脇の5つのアラーム
が一斉に鳴り出す。

ルイ、寝ぼけ眼でそれらを止めながら電
話をかける。しばらく呼び出し音が続く、

シヅキの声「(心底気だるそうに)……何？」
ルイ「自分で言ったじゃん……モーニングコ
ール」

シヅキの声「……ああ」

× × ×

昭和の雰囲気に残るレトロな内装の喫茶
店。

ルイとシヅキが座るテーブルに、老年の
マスターがゆつくりとした動作で2つの
コーヒーを置く。

ルイ「じゃあ、約束通りに。いただきます」
シヅキ「私も起きてはいたんだよ」

ルイ、テキトーに聞き流すように

ルイ「はいはい。でしょうねえ」

シヅキ「コーヒーおごるぐらい、ノーダメー
ジですけどね」

ルイ「(語気を強めて) はいはい。でしょう
ねえ」

むっとするシヅキ。

× × ×

ルイが大量のアラムで飛び起きる様子。
ルイの声「なんか毎回俺が電話してるんです
けど」

シヅキの声「コーヒー代だけで毎週起こして
もらえるなんて最高だねえ」

ルイの声「勝負にならないじゃん」

シヅキの声「ルイは毎週タダで美味しいコー
ヒー飲めるんだよ。ウインウインでしょ」
ルイの声「そういうもんかなあ……」

× × ×

ルイとシヅキが眠そうな顔で英語演習の
授業を受けている様子。

シヅキの声「ねえねえ、うちらマジでヤバく
ない？ 名前、出身、誕生日、あと低血圧
でしょ？」

× × ×

三軒茶屋の中心街を歩きながら話してい
るルイとシヅキ。

シヅキの声「あれなんじゃない？ 片っ方は
本当はスペアなの。神様は私かルイのどっ

ちかを作ろうとして、間違えて両方作っちゃった、みたいな」

× × ×
ルイがベッドの中で電話をかけている。なかなかシヅキが出ないのでイライラしている様子。

ルイの声「ほんと変なこと考えるよね」

シヅキの声「そういう風に考えた方が面白いじゃん」

× × ×
同じ喫茶店でルイとシヅキがコーヒーを飲みながら話している。

シヅキ、思い出したように

シヅキ「あ、そういえば *mixi* の日記読んだよ。空のやつ好き」

ルイ「(キョトンとして) は？ 非公開にしてたけど……」

シヅキ「いや、普通に読めたけど？ 全体に公開で」

ルイの表情が固まっていく。

シヅキがガラケーでサイトを開く。

シヅキ「ほら、(日記を読み上げる) 『空を見上げると、無性に家に帰りたくなる。けれどもそれは世田谷区のアパートでも、福岡にある実家でもない。もつと漠然とした家、どこにもない故郷。何故だか時折、全てを投げ出してそこに帰りたくなる』」

ルイ、血の気が引いたような顔で固まっている。

シヅキ「いいじゃん。私好きだよ」

ルイ、テーブルに突っ伏して悶える。

ルイ「あああああああああー！」

シヅキ「(笑いながら) あーあ、ドンマイ。よくあるよくある」

○ (回想戻り) 繁華街

茶沢通りの一角。インフルエンサー風の若い女性たちが並ぶファンシーなカフェの前で、ルイとシヅキが呆然と立ち尽くしている。

シヅキ「ホントに……ここ？」

ルイ「うん……間違いない」

シヅキ、無表情で店を見つめている。

ルイ「(悲しげな口調で) 隠れ家っぽくて好きだったんだけどな。時代か……」

シヅキ、急に笑い出して

シヅキ「だよねー。まあ、古い店だったもんね。そりゃ潰れるわ」

ルイ、その発言が許せない視線でシヅキを睨む。

ルイ「何でそんなこと言……」

シヅキ、強引に遮るように

シヅキ「ねえルイー。猫探してもいいけど、ちょっとは遊ぼうよ。せつかく再会したわけだしさあ」

ルイ「……はあ？」

シヅキ、ルイに有無を言わせない形で強引に腕を引っ張って走り出す。

○丸子橋

多摩川に架かる大きな橋の中央部分で、

ルイとシヅキが欄干にもたれて川を見ている。

シヅキが突然欄干の上に乗る。

ルイ「(慌てて) 何やってんだよ！」

3人組の男子高校生が奇異な目で見ながら通りかかる。

シヅキ「(高校生たちに) アイキャン、フラーイ！」

ルイ「今の子それわかんねーから。下りろよ」

高校生たちがコソコソ話しながら関わりたくない様子で去っていく。

シヅキ「じゃあルイ、上に来て下ろして」

ルイ「はあ？」

シヅキ「(おちよくるように) 大人になってもチキンでいいんですかあ？」

ルイ、舌打ちして恐る恐る上り、立ち上がる。

シヅキ「よろしい」

シヅキ、ルイの手を掴み、川側に体重を

かける。川に向かって落ちていく2人。
ルイ「うわああああああああー！」

突然落下していた2人が空中で消える。
そして元の橋の上の空間に穴が開き、元通り着地する。

ルイ「あああああああー！ ……え？」

啞然とするルイを笑いながら見ているシヅキ、片方の靴を脱ぎ始める。

シヅキ「時空の歪み、見つけたの」

シヅキ、靴を川に放り投げる。頭上から靴が落ちてくる。

シヅキ「世界の終わり、アツいっしょ？」

ルイ、欄干から川を見下ろして

ルイ「こんなところ、どうやって見つけたの？」

シヅキ「え？ (少し考えて) あー…今朝ね、写真撮ろうとしたらスマホ落としてさ。そしたら戻ってきたの」

シヅキ、笑いながら橋から飛び下り、また頭上から現れる。

その様子を呆然と見ているルイ。

× × ×

超巨大化している渋谷のモヤイ像を見て爆笑しているシヅキ。

ルイ「ねえ、そろそろ探さない？」

× × ×

渋谷のスクランブル交差点が時空の歪みですり鉢状に大きく凹んでいる。ルイとシヅキがその円周部分を縁取るように走っている。

はしゃぐシヅキを焦った表情で追いかけているルイ。

シヅキ「ヤバー！ 面白ー！」

ルイ「シヅキ、戻ろうよ」

○キャロットタワー・外壁(夕)

キャロットタワーの側面を垂直方向に走りながら登っているルイとシヅキ。シヅキは楽しげに走っている一方で、ルイは苛立ちと怒りの表情を浮かべている。

2人の目線から三軒茶屋の街並みと、沈

みゆく夕日が真横に見える。

シヅキ「絶景だねー」

シヅキ、持っていたペットボトルを上
に放り投げる。空中で回るような大きな弧
を描いてビルの壁面に落ちる。

シヅキ「重力もバグってるわー」

ルイ「（怒りつつ）こんなことしてる場合じ
やないって。時間ないんだよ」

シヅキ「ルイは真面目すぎるんだよ」

ルイはシヅキの腕を掴み、怒鳴る。

ルイ「いい加減にしろって！」

その瞬間、シヅキが振り払った腕の袖が
めくれ上がり、手首には3本のリストカ
ットの跡が明らかになる。

ルイ「……あ」

シヅキ、顔から笑みが消え、動揺が隠し
きれない様子ですぐに袖を直す。

ルイ、言葉に詰まる様子。

シヅキ、誤魔化すように笑って

シヅキ「……猫に引っ掻かれてさ」

2人ともしばらく黙り、シヅキが自嘲的
に

シヅキ「まあ、29年も生きてりや……色々

あるじゃん」

ルイ「……何があったの？」

シヅキ、軽口を叩くが弱々しい口調。

シヅキ「私に言わせりや、ルイの方が心配」

ルイ「……はぐらかすなって」

ルイ、真剣な表情でシヅキを見つめる。

シヅキ、だんだん声が震え始め、泣き始
める。

シヅキ「ごめん……変わってねえなあって、

言われたかったんだけど」

シヅキ、その場にしゃがみ込み、顔を伏
せる。

ルイ、シヅキの背中に手を触れようとす
るが、躊躇ってやめて隣に座る。

ルイ「ごめん。俺も……嘘ついた」

シヅキ、顔を上げてルイを見る。

ルイ「営業の仕事って言ったけど、本当は鬱

になって2年前に辞めたんだ。1年ぐらい無職で、今は吉祥寺の喫茶店でバイトして、どうにか生きてる。一番酷い時は、ベッドからも出れなかった」

ルイ、溜息をつく。

ルイ「正直将来のこととかも考えられない。昔の同級生がほとんど結婚して子供も生まれたりしてるのに、俺は、その日その日をただ生き延びるだけ。なんか……全種目で負けたなって思う」

少しの間、縦に引かれた空と街の境界線を無言で見ている2人。

シヅキ、ルイを見つめて

シヅキ「私も、夢……ダメだったわあ」

ルイ「人生、ムズすぎるよね。皆どんなチート使ってるんだろ」

シヅキ、ため息をついてから自虐的に笑い、自分のお腹を見つめながら手を添える。

シヅキ「(皮肉っぽく)それに私さ、『女』を生きる才能も……なかったみたい」

ルイ、目を泳がせてシヅキの横顔と腹部を交互に見て、事情を察して息を呑む。

シヅキ「川にさ……スマホ落として、時空の歪み見つけたって言ったじゃん？ でも本当はね……」

シヅキ、震える声で言い淀む。

ルイ「……言わなくていいよ」

シヅキ、ルイの顔を見てやんわりと頷く。ルイ「シヅキが消えた後ね、俺、必死に探したんだよ。でも学生課にも記録がないし、家に行ったら知らない人が出てきてさ」

シヅキ「(ちよっと笑う)私とおんなじ」

ルイ「そんなことしてたら、大学の皆からヤバイ奴だって認定されて距離置かれてさ。だんだん自分の記憶も信じられなくなっただけで、心療内科通わなきゃいけなくなった。シヅキのこと、夢だったんだってことで無理矢理納得しようとした」

シヅキ「(悲しそうに笑って)おんなじ」

自虐的に笑い合う2人。

シヅキ「あの喫茶店がなくなってたの、自分が否定されたみたいだった」

ルイ「(悲しそうに笑って) おんなじ」

× × ×

研究室。様々な人種の研究者たちがそれぞれモニターの前で作業しており、室内を響子が慌ただしく駆け回っている様子。ドユンが作業するPCにはルイとシヅキのそれぞれの名前付きの顔写真と、東京都内のマップに複数の点がマークされた画面が表示されている。

シヅキの声「色んなことが新しく置き換わって、大事なものが上書き保存されていく気がする。最初からそんなのなかったみたい。蒼井星月も朱本月星も、そんな人間はいなかったみたい」

響子が自分のデスクにある写真にぶつかって落とす。慌てて拾い上げながら、その写真をしんみりとした顔で見る響子。写真には高校時代の響子が学校の階段に座ってピースして写っているが、その隣には人一人分のスペースが不自然に空いている。

× × ×

キャロットタワーの壁面で沈んだ夕日の最後の光線を見ているルイとシヅキ。

シヅキ「ルイはさ、あの時……私が消えた後でどう思った？」

ルイ「(動揺して) え？」

シヅキの声が震える。

シヅキ「もし、消えたりしなかったら、2人とも、人生……違ってたかな？」

ルイ、言葉に詰まって答えられない様子。シヅキ、涙を流し、慌てて頬を拭いながら笑ってルイの髪をくしゃくしゃにする。シヅキ「しみったれた顔すんなよお」

ルイ、無理に笑ってシヅキの髪をくしゃくしゃにし返す。

ルイ「そっちこそ」

シヅキ「あー、もう！」

ルイ、シヅキが手櫛で髪を直している様子を見て

ルイ「黒も……似合ってる」

シヅキ「だって、大人ですからあ」

憂いを帯びた微笑みを作る2人。

ルイ、シヅキの濡れた頬と空を見て

ルイ「……やめようか？ 世界を救うの」

ルイ、立ち上がりながらスマホを出す。

シヅキ「え？」

ルイ「どうせ戻ったって、クソみたいな人生だからさ」

ルイ、スマホを思い切り真上に放り投げる。

ルイM「あの頃、シヅキがいなくなった後の毎日は、何もかもが虚しかった」

ビルと地上の2つの重力に引かれたスマホは空中で大きな螺旋状の弧を描いて飛び、ビルの表面に落下して破損する。

ルイM「世界を色付ける光のスペクトルは彩度を落とすし、僕はずっと6色だけの虹を見ているみたいだった」

真横に沈んでいく夕日を眺める2人。

ルイM「そこにはもう、戻れない。戻りたくない」

○カラオケ・店内（夜）

シヅキがオレンジレンジの『上海ハニー』を飛び跳ねて歌う様子。

× ×

ルイが恥じらいながら大塚愛の『さくらんぼ』を歌ってシヅキが爆笑している様子。

× ×

ゲームセンターでルイとシヅキが太鼓の達人をプレーしている様子。

シヅキの声「本当はちよっと怖かったんだ、思い出の場所を見に行くの。自分が人生の中で手放してきたり、落つことしてきた沢山の物が、そこにある気がしたから」

× × ×
ドンキホーテでお互いに変な仮装グッズ
を頭に被ってはしゃぐルイとシヅキ。

シヅキの声「あの頃の気持ちを通じて今の自分
を見つめると、私は正解をそこに置き去
りにして、間違いの方を持ってきてしまっ
た、そんな気持ち膨らんでいく」

× × ×
同じくドンキホーテ。アダルトグッズの
コーナーでシヅキが爆笑しながらデイル
ドをルイに近づけて追い回す。

シヅキの声「だけど家電みたい返品できな
いじゃん。やっぱりこっちゃって訳にいな
い。だから尚更思い出が眩しくて目がチカ
チカする。心が疼くし、息が詰まる」

× × ×
カラオケでシヅキが椎名林檎の『ギブス』
を熱唱している様子。

× × ×
2人でバンプオブチキンの『天体観測』
を多幸感溢れる表情で歌っている様子。

シヅキの声「けどそれが……宝物だって思
ってた時間が、ただの何でもない瞬間に過
ぎなかつたら？ 知ったら終わってしまう
から、そのままでもいいと思った」

× × ×
研究室。響子たちがパニックになってい
る様子。モニターに大きく「MISSING」
と表示されており、ドユンが真剣な表情
でパソコンでコードを書いている。

× × ×
ルイとシヅキが夜の三軒茶屋の繁華街を
ハイテンションに走り抜ける様子。

シヅキの声「神様に祈ったよ、せめて夢を見
てるままでいさせて、それだけは奪わない
でって。頭の中だけくらは、光を感じて
いたいでしょ？」

× × ×
カラオケ画面が切り替わり、和田光司の
『Butter-Fly』が流れ始める。

ルイ「ヤベー、デジモンじゃん！」

シヅキ「オラァーオラァー、懐かしさの波状攻撃だこの野郎おー！」

シヅキ、ルイにもマイクを手渡ししながら歌い始める。

シヅキ「(歌声)ゴキゲンな蝶になってー、きらーめく風に乗ってー、今すぐー、君にー会いにー行こう」

ルイM「そういえば、大事なことをすっぱかす時は、何故かいつもカラオケだった」

ルイ、歌うシヅキの横顔を見つめる。

○(回想・2009年)熊澤大学・学食

混みあっている食堂でルイが学部の友人男子たちと4人で食事している。男子A

とCが盛り上がっているが、ルイは居心地が悪そうな表情で愛想笑いをしている。

男子A「(ガラケーを見ながら)今からラウワン行こうって。男3女3で」

男子B「一人余るじゃん」

男子C「次ドイツ文学か。出席どうする？」

男子ABC、同時にルイを見る。

ルイ、箸を止めて察したように

ルイ「……じゃあ、俺が代返しとくよ」

男子ABC、わざとらしく

男子A「いやー、マジでごめん」

男子B「ほんと朱本神だわ」

男子C「あざす」

そこへ通りかかったシヅキが

シヅキ「おー、ルイじゃん。お疲れーい！」

と後ろからルイの髪をくしゃくしゃにして去っていく。

ルイ「うわっ、もー」

ルイ、髪を直しながら、手を振って去って行くシヅキを睨む。

○同・大教室

多くの学生が私語や寝たり、ゲームしたりしている中、ルイは不服そうな顔でノートを取っている。手元には4枚の出席

カード。

高齢の教授が目を伏せてボソボソとやる
気なさそうに授業を行っている。

教授「えー、ゲーテは、文化、政治、社会の
全ての分野で影響を与えた、ドイツを代表
する作家であり、その名前はドイツの歴史
とほぼ同義です」

後ろの席から肩を叩かれ振り向くルイ。

そこにはシヅキの姿。

ルイ「(小声) 何やってんの？」

シヅキ「そっちこそ。(呆れたような口調で)
何であいつらのためにそんなことやってあ
げてんの」

ルイ「(小声) 英文科は男子少ないからハブ
られると面倒なんだよ」

シヅキ、ルイの耳元で

シヅキ「『自由であろうと望んだ瞬間に、人
は自由となる』あー、誰だっけな、これ」

ルイ「は？」

シヅキ、ルイの机の上の出席カードを奪
い取る。

ルイ「あ、ちよっ！」

シヅキ、カードを持って教室を出ていく。
ルイ、慌てて追いかける。

○同・廊下

教室のドアの前でシヅキがカードを持っ
て立っている。

ルイが追ってきて

ルイ「返せよ」

シヅキ、3枚の出席カードを破る。

ルイ「あー！」

シヅキ「残念」

ルイ「(溜息) 何だよもう」

シヅキ「カラオケでも行こうよ」

ルイ「はあ？」

シヅキ「授業に戻って、何か変わる？」

ルイ、考え込む表情。

○同・大教室

ルイ、恐る恐る教室に戻り、出席カードを教授の横の箱に入れる。

教授「『若きウエルテルの悩み』は、青年ウエルテルが愛と自由、社会の制約という三つの間で葛藤する姿を描いています」

教授、一瞬黙り、ルイを見る。目が合ったルイ、そのまま苦笑いで会釈してそっと退散していく。

教授、また目を伏せてボソボソと話し始める。

教授「この作品は、封建社会から市民社会への移行期に生きた人々の葛藤や苦悩を象徴し、ロマン主義の波を一層高めました」
他の学生たちも出席カードを持ってぞろぞろと立ち上がり始める。

○カラオケ・店内

ルイとシヅキが和田光司の『Butter-Fly』を熱唱している。

シヅキ「(歌声) 無限大な夢のあとのおー、
何もない世の中じゃあ」

ルイ「(歌声) そうさ愛しいー、想いも負け
そうにーなるけどお」

○(回想戻り)元のカラオケ・店内

現在のルイとシヅキが『Butter-Fly』を熱唱している。

シヅキ「(歌声) Stay しがちなイメージだからのー、頼りない翼でもー」

ルイ「(歌声) きっと飛べるさあー」
ルイ・シヅキ「(歌声) On My Love」

昔に戻ったような表情ではしゃぐ2人。
ルイM「その他大勢の笑顔のために、シヅキが涙を流すことになるなら、誰も笑えない方がいい。僕はそう思った」

× × ×

シヅキがソファで眠っている。その横でボーっとモニターで流れるダムチャンネルを見ているルイ。
ルイ、感傷的な顔でシヅキの寝顔を見る。

ルイM「もうすぐ消える。137億年の歴史も、こんな瞬間も、僕らの思い出も」

備え付けの電話が突然鳴り、ビクリとするルイ。恐る恐る電話に出る。

ルイ「……はい？」

響子の声「スマホ、粗末にしなさんな」

ルイ「何でここが……」

響子の声「ドユンはその道のプロだって言ったでしょ？」

ルイ「(皮肉っぽく)監視社会万歳ですね。」

『ビッグブラザーは君を見ている』

響子の声「本当に宇宙と心中するつもり？」

ルイ、シヅキの顔を見つめてしばらく無言を貫いて

ルイ「シヅキ、どうせまた消えるんでしょ？」

響子の声「それは……半分は、あなた次第」

ルイ「え？」

響子の声「1杯だけ飲みに出てこない？」

○居酒屋・店内(深夜)

酔いが回ったサラリーマンや学生で賑わう大衆居酒屋。カウンターにルイと響子が並んで座り、響子はビールをグイグイ飲み、ルイは手を付けずに浮かない顔で座っている。

ルイ「明日で宇宙が消えるのに、こんなことしてていいんですか？」

響子「だから飲まなきゃやってられないの」

ルイ「半分は僕次第って、どういう意味ですか？」

× × ×

カラオケ。眠っているシヅキと、テーブルには「一瞬出てきます。消えてないから! ルイ」とボールペンで書かれた紙ナプキン。

響子の声「言ったでしょ? シヅキさんとの関係性が曖昧なままなら、また宇宙が接する度に会える」

× × ×

居酒屋で話すルイと響子。

ルイ「猫捕まえて終わりじゃないんですか？」
響子「そもそも暗黒物質なんて人類がコントロールできるようなものじゃないの。何度捕まえたってすぐにまた迷い込んでくる。その繰り返し。私達がやってるのは雪かきみたいなものね」

ルイ「何じゃそりゃ」

響子「世界の安定なんてそんなものよ。地球上でだけでも戦争災害疫病テロ差別殺人。宇宙規模だともうお手上げ。そういう不確実性とか不安を全部考慮したら生活が破綻するから、人類は正常性バイアスでどうにかやりくりしてんの。危険が自分らに近いか遠いかだけの話」

ルイ「常に消滅の危機なんですね」

響子「だから未来の心配をしすぎてもあんまり意味はない。なるようにしかならない」

響子、ビールを一気に飲み干す。

ルイ「それにしても、何で響子さんは、そんなに詳しいんですか？」

響子、真面目なトーンに変わる。

響子「私も同じだったの」

響子、スマホで写真を見せる。高校時代の響子が隣に不自然なスペースを空けて写っている写真である。

ルイ「これ、響子さん？」

響子、頷いて隣の空白部分を指差す。

響子「この頃、香織っていう親友がいたの。何でも分かりあえて、いつも一緒だった」

響子、愛おしそうに空白部分を撫でる。

響子「だけどもある日、自分が彼女に恋してるって気づいた。香織はね、とーっても美人で賢くて、お洒落で面白くて、最っ高の女の子だった」

ルイ「彼女も……？」

響子「放課後の自転車置き場でキスしたの。」

そしたら、消えちゃった……」

ルイ「……そっか」

響子「私が物理学の道に進んだのは、もう一度香織に会いたいと思ったから。きっと彼

女以上に誰かを好きになることなんてないからね。(自虐的に) どう？ 私もなかなかヤバイでしょ。30年近く前だよ」

ルイ「(首を横に振る) 正常ですよ。むしろ大半の、すぐに切り替えられる人たちが方がどうかしてるんです」

響子「(少し笑って) 私も香織も、枝分かれしてた宇宙の可能性の1つ1つに過ぎなかったの。それがキスの瞬間、確定して収縮しちゃった」

響子、少し黙ってから

響子「収縮と統合はあらゆる物質が辿る定めだけど……大人になるって、そういうことなのかもね」

ルイ「大人になる……か」

響子「だけど……ちよつと寂しいよね。それと引き換えに、色んな物が零れ落ちてる。得た物より失った物の方が、多分多い」

ルイ、そつと頷く。

ルイ「シヅキの話、してもいいですか？」

響子「どうぞどうぞ(店員に向かって) すいません、生もう1杯」

ルイ「僕のハタチの誕生日の直前に、父が事故で亡くなったんです。それで葬儀で福岡の実家に戻ったまま、塞ぎ込んでしまっ

○(回想・2009年) 福岡の風景

博多駅を中心とした街並み。

ルイの声「東京に戻る気にもなれなくて、しばらく大学も休んでました」

○ルイの実家・リビング(夜)

ファミリー向けマンション。ルイが棚に置かれた父親の遺影と遺骨の前で放心状態になって横になっている。

母親が心配そうに話しかける。

ルイの母親「お父さん、あれでルイのこと心配しとったんよ」

ルイ「(無気力に声で) ……うん」

窓際の床に置かれたガラケーにシヅキか

らの着信。

ルイ、しばらく画面を見つめてから無言で電話に出る。

シヅキの声「今実家でしょ？」

ルイ「え？ まあ……」

シヅキの声「下見て下」

ルイ、恐る恐るペランダから下を見る。

シヅキが軽自動車の横で電話しながらこちらを見上げて手を振っている。

○軽自動車・車内（夜）

シヅキが運転し、ルイが暗い顔で助手席に座っている。車は福岡市中心街を抜けて糸島市方面へと向かう海沿いの道を走っている。

シヅキ「ブラウン先生に聞いたよ。言ってくればよかったのに」

ルイ「……わざわざ言うようなことじゃないと思う」

シヅキ、語気を強めて

シヅキ「アホ。わざわざ言うようなことに決まってんじゃない。平気じゃないのに平気なフリしてると、気持ちが悪くなるよ」

ルイ「ごめん……ていうか、もしかしてわざわざこのために福岡来てくれた？」

シヅキ「私もちようどこっち来ててさ。ばあちゃん家泊ってたんだよ」

ルイ「……本当に？」

シヅキ「本当だよ。バーカバーカバーカ」

ルイ、少し笑う。

○二見ヶ浦海岸（夜）

市街地から遠く離れ、暗く静かな海岸。

夜空には三日月と沢山の星が見える。

海面に夫婦岩が浮かび、その向かいの波打際には大きな鳥居が立っている。

夫婦岩と鳥居を右手に拝む位置の岩場の、

一番海に突き出した大きな岩の上にルイ

とシヅキが腰掛けて話している。

シヅキ「ここ、幼稚園の頃にパパに連れてき

でもらったんだ。いいでしょ？」

ルイ、頷いて

ルイ「そんな昔のこと覚えてんの？」

シヅキ「絶対忘れないよ。パパ、私が8歳の時に死んじゃったんだ。それでお母さんの地元の千葉に引っ越したの」

ルイ「ごめん……」

シヅキ、ゆっくり首を横に振り

シヅキ「だからね、私わかるんだよ。キッツいよねー、親が死ぬってさ」

ルイ、目を潤ませて頷く。

シヅキ「海の波みたい。引いたと思ったら、急にまた大きいのが来て。たぶんこれは、いつまでも消えない」

ルイ、海を見つめながら、ゆっくりと話し始める。

ルイ「夏休みに帰省した時ね、東京戻る前にどうでもいいことで喧嘩してさ。最後に……（声を震わせ）謝りたかったなあ」

シヅキ、そっとルイの背中を擦る。

シヅキ「後悔だったとしても、忘れちゃダメだよ。その気持ち」

ルイ「ん？」

シヅキ「パパが遠ざかっていくのがね、何となくわかるの。記憶の中のパパが、今年は去年よりも遠い場所にいる。たぶん来年はもっと遠のく」

ルイ「やっぱり……記憶って薄れる？」

シヅキ「（頷く）だからね、時々ばあちゃんに会いに来るの。ばあちゃんを通してパパに会う」

ルイ「肉親だもんね」

シヅキ「そう。パパを構成してた原子が、ばあちゃんの中にあるから。遺伝子も、面影も。で、ここに来て星空を眺めて、宇宙を感じるのは」

ルイ「何で宇宙？」

シヅキ、岩の上に仰向けに寝転がる。ルイも合わせてそうする。

シヅキ「ルイの日記にあったじゃん、空を見

上げると無性に家に帰りたくなるって」

ルイ「(悶える)マジでやめろよ」

シヅキ「(少し笑う)違う違う。あの気持ちね、すごく分かるの。何億年も前に宇宙の片隅で爆発して死んだ星の欠片が、地球に降り注いで、私たちの体を作る元素になったんだよ」

ルイ「(少し拗ねたように)へー」

シヅキ「今この瞬間に存在してるものは、遠い宇宙の過去に原型があって、それから私たちは未来ではまたバラバラになって何か別の物質として存在を続けるの」

ルイ「なんか、生まれ変わりたい」

シヅキ、星空を指さす。

シヅキ「だからあの空の向こう、宇宙の果てに私たちの魂の故郷がある。同時にパパはまた何かになって、宇宙を漂ってるの」

ルイ「お星さまになるってやつかあ」

シヅキ「そういう子供騙しじゃないの。私のはもつと科学的発想に基づいてるから」

ルイ「はいはい」

少し笑う2人。

ルイ「父さんが死んだ日にね、心霊現象っていうか……あつたんだよね」

シヅキ「心霊現象？」

ルイ、岩の上に体育座りする。

ルイ「帰り道に、父さんが急に現れた」

シヅキ、座り直す。

ルイ「それで『おー、元気か？』って言うてすぐ消えちゃった。その時が、父さんが事故に遭った時間だったって後で知った」

シヅキ「虫の知らせってやつかもね」

ルイ「ただの妄想かもしれないけど……最後に一瞬話せたかもって思えたら、少しでも安心したんだよ」

ルイ、無言でルイを見つめているシヅキを見返し、

ルイ「……信じる？ 科学的じゃないけど」

シヅキ、ゆっくりと海面に視点を移してシヅキ「科学じゃ証明できないこともある」

ルイ「……本当に？」

シヅキ「ヘレンケラーも言ったしね、『世界で最も素晴らしく、最も美しいものは、目で見たり手で触れたりすることはできません。それは、心で感じなければなりません』ってさ」

× × ×

時間経過。笑い合った後、しんみりとした瞬間が戻る。

シヅキ「10年後とかに、今日のこと思い出したら笑うだろうね」

ルイ「10年後かあ……何してんだろ」

シヅキ「ルイの夢は？」

ルイ、少し黙って初めて話したという口調で

ルイ「……物書きになりたいんだ。できれば小説とか」

シヅキ「いいじゃん。私はドキュメンタリー、ルイは小説。同い年の2人でノンフィクションとフィクションの天下取ろうよ」

ルイ、微笑んで空を見上げて

ルイ「じゃあ、星に……宇宙に約束」

シヅキ「宇宙は覚えてるからね。そう、思わない？ 10年後、10光年先の宇宙から地球を観測したら、今私たちがここで話をしている瞬間がそのままあるんだよ」

星空を見ながら話すシヅキが髪を耳にかける。ルイはそれを見て、その仕草に異性的な魅力を感じ取った表情をする。

シヅキ「私たちが死んでいなくなった後でも、その分遠ざかって地球を見れば、やっぱり私たちはここにいるんだよ。宇宙が続く限り、この瞬間はずっとあるんだよ。それってさ、何か……涙出そう」

ルイ、しんみりした表情でゆっくり頷く。ルイとシヅキ、無言で見つめ合う。波音だけが聞こえる。

ルイ、シヅキの眼差しに照れて俯いてしまふ。腕時計が視界に入り、時刻が23時59分だと気づいて

ルイ「あと1分でハタチだ」

シヅキ、一瞬ガッカリしたような表情を浮かべ、遠い目で海を見つめる。しかしすぐにはしゃいだ口調が変わる。

シヅキ「そうだ！ せっかくだからさ、未来の自分たちに最高のプレゼントあげようよ」
ルイ「プレゼント？」

シヅキ「ハタチの瞬間に飛び込むの！ で、10年後、30歳の誕生日も今日と同じようにここから飛び込む」

ルイ「マジで!？」

シヅキ、財布と携帯を岩の上に置く。

シヅキ「ハタチの私たちと、30歳の私たちが、時を隔ててシンクロする。最高にロマンチックじゃん！」

シヅキ、腕時計を覗ながら

シヅキ「ほら行くよ！ 4、3……」

ルイ「いやいや、ヤバイよ、絶対寒いって」

シヅキ「2、1……」

ルイ、オロオロする。

シヅキ「ハッピーバースデー！」

シヅキ、0時ジャストで海に飛び込む。

ルイ「(怖気づいて立ちすくみ) マジか」

シヅキ「(瞬時に海面から顔を出し) 寒っ！

ヤバイヤバイ！ 心臓止まる！」

ルイ「ちよっ……大丈夫？」

シヅキ「もー、マジチキンじゃん。何やってんのー」

ルイ「だっさあ……11月だよ」

シヅキ「あーあ。ルイのバーカ。10年後に後悔するよ、飛んどきやよかったって」

ルイ、悔しまぎれという口調で

ルイ「シヅキは明日後悔する。熱出して」

シヅキ「うるさいバーカ、バーカ、バーカ」

シヅキ、水をルイに引っかける。

ルイ「冷てっ！」

シヅキ、笑いながらもどことなく苛立ちが混じる表情でルイに水をかけ続ける。

ルイの声「シヅキの言う通りでした。今も後悔してます。あの時、シヅキと一緒に飛び

込めばよかったって」

○(回想戻り)元の居酒屋・店内(深夜)

ルイと響子が話している。

響子「どうしてこの話、私にしたの？」

ルイ「何故か、無意味に話したくなっただけです。すいません」

響子「(微笑んで)わかるよ。私も香織の話、無意味にしたくなるもん。無意味に名前連呼したり、写真を何度も見返したり。でもね、宇宙は鈍感だから、その意味を知らない。無意味が大きな意味を持つって、宇宙は全然気づかないの」

ルイ「(溜息をつき)あー、シヅキ、シヅキシヅキシヅキ……シヅキ」

ルイ、テーブルに突っ伏して

ルイ「できるなら、もう一度、一緒に海に飛び込みたいです」

響子「後悔が、その人を作る」

響子、ルイの背中を擦る。

響子「それと心霊現象の話。妄想じゃないよ、量子もつれっていうの」

ルイ「量子もつれ？」

響子「2つの量子が相互作用を持ち、片方の量子の状態が変化すれば即座にもう一方の状態も変化するという現象」

ルイ「(ポカンとして)え？」

響子「そうね。ロマンチックな言い方だと、遠く離れた場所にいる恋人たちの心が一瞬で通じ合うようなものなの。一方が涙を流せば、もう一方も何故か胸が痛む、みたいな。これはどんなに遠く離れてても起こる。だからあのインシュタインが、不気味な遠隔作用と呼んだの」

ルイ「へー、すごい」

響子「親子だから同じ量子を共有してたのね。だからあの瞬間、一時的にあなたとお父さんの心がシンクロした。本当に話したの」

ルイ「……本当ですか？」

響子「この世界は悲しいことばかりだけど、

たまにはそういう素晴らしいことが起きる。
科学者の私が保証する」

ルイ、目を潤ませて微笑む。

響子「そういう奇跡をね、再現性のある形で
作り出すために、私もドユンも努力してる」

響子、鞆からスマホを出して

響子「これ、無いと困るでしょ？」

ルイ、少し間を置き、頷いて受け取る。

○カラオケ・店内（深夜）

ルイが部屋に戻ると相変わらずシヅキは
寝ている。袖がめくれて手首の傷が顕わ
になっている。

ルイ「苦しい時に、一緒にいなくてごめん」

ルイ、シヅキに上着をかけながら、テー
ブルの上のナプキンが皺くちやで、更
にはインクの文字が滲んでいるのに気づく。
そして息を吞んでシヅキを見つめる。

ルイ「何で遠くにいるんだよ。こんなに近く
にいるのにさ」

○三軒茶屋の風景（朝）

三軒茶屋駅前のビッグエコー。

○カラオケ・店内（朝）

ルイがソファで寝ていると、シヅキが肩
を叩いて起こす。

ルイ、ぼんやりとして

ルイ「シヅキに起こされるなんてね」

シヅキ「じゃあコーヒーはルイのおごり」

微笑み合う2人。

○世田谷公園・噴水広場（朝）

ベンチに座り、コンビニのコーヒーとパ
ンで朝食を摂るルイとシヅキ。

空には暗い雲がかかっており、今にも雨
が降りそうな天気。

シヅキ「（空を見て）世界の終わりって感じ」

シヅキ、腕時計で時間を確認して

シヅキ「あと、4時間。そうだ……」

シヅキ、思いついた様にバッグからインスタントカメラを出す。

シヅキ「ドンキで買ったやつ。撮ろっ？」

シヅキ、片目の前で親指と人差し指で輪を作り、『さくらんぼ』を口ずさみ、ルイは硬い笑顔で

シヅキ「隣どおしあーなたと、あーたしさくらんぼー」

シャッターを切り、2人で写ったチェキが出てくる。

シヅキ「もういっかい！」

シヅキ、楽しそうにシャッターを切る。

ルイ、笑顔を消して真面目なトーンで

ルイ「ねえ、シヅキ……」

シヅキ「ん？」

ルイ、ゆっくりと言葉を吐き出す。

ルイ「ごめん。やっぱり……猫、探したい」

シヅキ、チェキを見つめて少し間を置き

シヅキ「……そっか」

ルイ、周囲を見て。

ルイ「全部変わっていく。知ってる景色も、人も、記憶の中だけの存在になっていく。

エントロピーの増大と同じで、不可逆」

シヅキ「(少し笑う)それ、私が教えたやつ」

ルイ「だけど今、10光年先の宇宙から地球

を見たら、大学の頃の自分たちがいる」

シヅキ、ハツとした表情でルイを見る。

ルイ「10年後なら、20光年。俺たちが死

んでも、宇宙は覚えてる。でしょ？」

シヅキ、しばらく無言でルイを見つめ、

微笑んで頷く。

シヅキ「本当は……最初から目星、ついてた

んだ。猫の場所」

ルイ「え？」

シヅキ「駒沢オリンピック公園の広場。ルイが消えた前日」

○(回想・2009年)大通り(夜)

ルイが寒さに震えながら自転車で首都高下の道を三軒茶屋方面に走っている。

○シヅキの部屋・玄関前(夜)

シングル向けマンション。ルイが震えながらチャイムを鳴らすが無反応。

玄関脇の小窓からは明かりが漏れている。ルイ、チャイムを連打する。

ドアが開き、前村が出てくる。

前村「(面倒くさそうに)何か?」

ルイ「(気まずそうに)えっと……シヅキ、います?」

前村「何で?」

ルイ「いや……僕のノートを、間違えて持っていたみたいで。電話出ないから……」

中からシヅキの声。泥酔している様子。

シヅキの声「ル〜イク? バツカヤロー、バ

ーカバーカバーカ。クソチキンがあ〜」

前村、呆れた顔で室内を指差し

前村「……ワイン飲みまくったから。(舌打ち)ちよっと待ってて」

前村、ドアを閉める。

○住宅街(夜)

三軒茶屋の住宅街を泣きそうな顔でトロトロと自転車を漕ぐルイ。

ルイ「(やさぐれて)結局は、尊敬できるお洒落でカッコいい先輩……ですかあ」

ルイ、何か思い出した様子で突然急ブレーキをかける。

○シヅキの部屋・玄関前(夜)

ルイがチャイムを連打し、前村が苛立った様子でドアを開ける。

前村「マジで何なの?」

ルイ、オドオドして声が震える。

ルイ「あー、いや……シヅキは……えっと、お酒、飲めないですよね」

前村「だから?」

ルイ「だから……無理やり、飲ませませんでしたか? もしくは、断れない雰囲気」

前村「何なんだよお前?」

ルイ「ただの……シヅキを、心配するだけの男です」

前村、ルイを突き飛ばす。ルイ、その場に倒れる。

ルイ「痛って」

前村「帰れよ」

ルイ、共用スペースに響く大声で。

ルイ「ふ、不同意での性交は、じゅ、準強姦罪ですよ！ 内定取り消しになりますよ」

前村、舌打ちして部屋に戻る。

ルイ、その場に座り込んだまま、手と足が震えているのを抑えようとする。

ドアが開き、上着を着た前村が

前村「萎えたわ」

と吐き捨てて帰っていく。

○熊澤大学・中庭

ルイとシヅキが口論している。

シヅキ「だから俺は、助けようと思って……」

ルイ「私が助けてって頼んだ！？ 博人さん返事もしてくれないんだよ？」

シヅキ、怒鳴りながら涙目になる。

シヅキ「せっかくメディア関係にツテできたのに。インターンとかもさせてくれるって言ってたのに」

ルイ「ごめん……本当にごめん」

シヅキ「マジで消えて、もう話しかけんな！

朝の電話もしたら殺す」

ルイ、泣きそうな顔で頷く。

ルイの声「今考えたら、俺キレられるのやっぱおかしくない？」

シヅキの声「ごーめーん。ガキでした」

○駒沢オリンピック公園（夜）

中央広場。記念塔の前で無言でモジモジして突っ立っているルイとシヅキ。

シヅキの声「確かこの時ってさ、10日ぐらい口聞かなかったよね」

ルイの声「俺がメールしたんだよ。ちゃんと話そうって」

シヅキの声「なーんかすぐにごめんって言えなかつたり、変なとこ似てたよね」

1匹の野良猫が現れ、ルイの足元に寄り、自慰行為を始める。

ルイ「うわ！ やめろよ！」

猫、すぐに逃げ去って行く。

シヅキ、それを見て爆笑する。ルイも自虐的に笑う。空気が何となく和み、

ルイ「お節介だったかも。余計なこととしてごめん」

シヅキ「（首を横に振る）私こそごめん。あんなクズに媚び売って、バカだった」

ルイ「シヅキは、自分の力で実現できるよ」

シヅキ「ありがとう。本当は嬉しかったよ」

シヅキ、微笑んでルイを見つめ、意味深な口調で

シヅキ「どうしてあそこまでしてくれたの？」

ルイ、照れ隠しに冗談っぽい口調で

ルイ「そ、そりゃあほら……：社会正義ですよ。泥酔して判断力を失った女性をアレしようとする男なんて、去勢に値するからね」

シヅキ、少しガツカリした表情をする。そして空を見上げて

シヅキ「あ、星、今日は綺麗」

ルイ「流れ星とか、見えないかな」

シヅキ「ルイはさ、流れ星の音って聞いたことある？」

ルイ「流れ星って、音あるの？」

シヅキ「電磁波音っていつてね、たまに聞こえるんだって」

○（回想戻り）駒沢オリンピック公園

雨が激しく降る中央広場。ルイとシヅキが傘を差して立っている。

シヅキ「ここのはずなのに……」

ルイ「いないね」

× × ×

公園内をウロウロして猫を探している様子の子の2人。ルイが電話している。

響子の声「たぶんそれは普通の猫ね。何かも

つと、感情が大きく動いた瞬間に猫と関わった記憶はない？」

ルイ「感情が動いた瞬間……？」

× × ×

駒沢公園通りを歩いている2人。

シヅキ「ヤバくない？ もう12時なるよ」

ルイ、焦った顔で考えている様子。

ルイ「他にもう猫の記憶は……」

コンビニの店先で老婦人が雨宿りしている。シヅキがルイの言葉を遮り、駆け寄っていく。

シヅキ「ちょっと待ってて」

シヅキ、老婦人に傘を渡して走ってルイの傘の中に入ってくる。

シヅキ「詰めて詰めて」

ルイ「宇宙が消えるかどうかって時に……」

× × ×

(フラッシュ)シヅキが捨て猫の上に傘を置いて、雨の中走り去っていく様子。

× × ×

ルイが呆然と立ち止まっている。

シヅキ「どうした？」

ルイ「……見つけた。猫」

○路地

住宅街にある、熊澤大学の建物が近くに見える路地。ルイと、怪訝な表情のシヅキが立っている。

シヅキ「こんなとこ一緒に来たっけ？」

ルイ「……何で、いないんだ？」

スマホに着信。ルイが出る。

響子の声「まだ？ もう時間ないよ！」

空の色が真っ白になる。遠くに見えるビルの上の部分から消え始める。

ルイ「ここのはずなんですけど……」

響子の声「……シヅキさんに、そこがどんな

場所か、説明しなきゃいけないの」

ルイ「え？」

響子の声「2人同時に観測しなきゃいけない。そのために、彼女の認識も必要」

ルイ「そんな。それじゃあ……」

シヅキが首を傾げる。

ルイ「夏休み明けの、最初の授業日の朝。シヅキと出会う前……」

○（回想・2009年）路地

大学近くの住宅街にある路地。本降りの雨。ルイが傘を差して歩いている。

路地の隅でアッシュグレイの派手な髪色の女性が、傘を差したまましゃがんでおり、そちらを気にして見るルイ。

その女性は箱の中に捨てられている小さな黒猫の上に自分のビニール傘を置き、濡れながら走っていく。大きな赤いチェリー型のイヤリングが揺れる。

ルイの声「そんな行為を、いつもやっていますって感じでやって去っていくのが素敵だと思っただ。きっと彼女が見てる世界は、皆と違っていて、そんな世界を覗いてみたいと思っただ」

ルイ、彼女を目で追う。

○熊澤大学・教室

既にブラウンが教壇におり、時間ギリギリでルイが教室に駆け込むと、後方の席に髪を濡らしたシヅキが欠伸して座っている。

ルイの声「教室に行ったらその子がいた。それで……」

ルイ、息を呑み、小走りでシヅキの前の席に座る。

○（回想戻り）元の路地

猫の箱があった場所を見ながら、ルイとシヅキが話している。大学の建物が先端の方から白い闇に飲み込まれていく。

ルイ「シヅキが訳してって声かけてきて……本当は、心の中でガッツポーズしてた」

黙って見つめ合う2人。周囲がどんどん白い闇に飲み込まれていく。

スマホから響子の声。

響子の声「お願い！もう待てない！」

シヅキ、全てを察した表情で泣きながらシヅキ「ルイ……言わないで。お願い」

ルイ、涙を流して黙る。しかし景色が消えていくのを見て、苦しそうに

ルイ「ここで、シヅキに……一目惚れした」

シヅキの姿が一瞬で消える。

ルイ、無人の空間に向かって泣きながらルイ「本当は最初から、シヅキが好きだった。ずっとずっと、好きだった」

目の前に黒猫が現れ、ルイの足元に擦り寄ってくる。

ルイは猫を抱き抱えて傘を放り出し、雨に濡れながら号泣する。

白い闇が突然晴れ、一瞬で通常の景色に戻る。

響子の声「ルイ君、ありがとう。あなたは世界を救った」

× × ×

(フラッシュ) 大学の教室でルイとシヅキが再会した時の様子。シヅキがはしゃぎ、ルイが呆然としている。

ルイM「シヅキと過ごした今日は、昨日の延長線上にあった」

× × ×

研究室でスタッフたちが大喜びしている様子。響子とドユンが視線を合わせて少し切ない表情をする。

ルイM「だけど明日は、きっともうそこには今日とは全く違う世界が広がっている」

× × ×

ルイが猫を抱き抱えて号泣している。ルイM「再び僕は過ぎ去った時間の余韻を引き延ばしながら、それに縋るように生きていくことになるのだろう」

○井の頭公園

秋が深まった公園をルイが俯いて歩いている。カップルが手を繋いで歩いている

様子が視界に入り、溜息をつく。

○商店街

吉祥寺の七井橋通りをルイが歩いている。クリスマス飾り付けがされた店が並ぶ。雑貨屋の前を通りかかると、店先にシズキが大学時代に着けていたチェリー型のイヤリングが売っている。

ルイ、立ち止まってスマホケースに挟まれたチェキを見る。世田谷公園でシズキと撮ったものだが、そこにはルイ1人しか写っておらず、隣には1人分の空白。肩を落として店を離れるルイ。

○ルイの部屋(夜)

真つ暗な部屋。ルイがテレビで鯨が泳いでいる映像を無表情でボーっと見ている。床には脱ぎ散らかした服や空のペットボトル、コンビニの袋が散乱している。

○武蔵堂珈琲・店内(夕)

お客はゼロ。ルイと細田が床で割れたカップを片付けている。

細田「(溜息) 気をつけてよ。ちよつと最近多いよ」

ルイ「すいません…:本当にすいません」

入り口のドアが開き、響子とドユンが入ってくる。ルイの表情がこわばる。

響子、言わずに深々と頭を下げ、ドユンはそわそわしている様子。

細田「ああ、どうもどうも。いらっしやい」

ルイ「(強い語気で) 何の用ですか？」

細田「お客様にその態度はないだろ」

響子「マスター、いいの。ルイ君、ごめんなさい」

ルイ、俯いて無言を貫く。

響子「ちよつと話を聞いてほしい」

ドユン「実は…:シズキさんともう一度繋がることできるかもしれないんです」

ルイ「え？」

響子「ただ……物凄く成功率は低いし、大きなリスクを伴う」

ルイ「……どういうことですか？」

響子「量子もつれの話、前にしたよね。お父さんが亡くなった瞬間に一瞬意識が繋がったって」

ルイ「ああ、ええ。シヅキともその……量子もつれを？ 宇宙の向こう側と？」

ドユンが鞆を開け、スマホサイズのデバイスを取り出す。

ドユン「量子エンタングラーといいます。脳内の微視的な量子過程を操作して、二者間で量子もつれを人工的に作り出します」

ルイ「そんな物、何で隠してたんですか？」

ドユン「リスクが大き過ぎて没になりました」

ルイ「え？」

ドユン「脳の量子状態を操作するので、大きな負荷がかかります。記憶や認識といった脳の基本的な機能に影響を与える危険があります」

響子「つまり、接続に失敗すれば、あなたはシヅキさんに関する記憶を全て失う」

ルイ「そんな……」

一同、沈黙。

ドユン「それに、この装置を使うには2人の脳波のパターンと意識を完全に同期させる必要があります」

ルイ「どういうことですか？」

響子「シヅキさんもあちらの世界でこれをつけて、同時刻、同じ場所で全く同じ行動を取り、同じ精神状態になる必要がある」

ルイ「ちよつと待ってくださいよ。事前の連絡もなしでそんなの無理でしょう！」

響子「……うん、成功率が低いというのはそういうこと」

ルイ、溜息をつく。

ルイ「ぬか喜びさせないでくださいよ」

響子「ごめん。お騒がせしました」

響子とドユン、申し訳なさそうに帰っていく。

ルイ、ずっと俯いたまま。

細田「朱本君、思い出しに浸りながら生きていくってことも、そんなに悪いことじゃないよ。人生ってそういうもんだよ」

ルイ「人生、失望ばかりです」

細田「まだ若いのにそんなこと言ってる」

ルイ「若かったって、明日で30ですよ」

細田「60の俺からしたら30なんてガキだよ」

ルイ、突然ハツとして

ルイ「30！」

ルイ、駆け出して店のドアを開ける。遠ざかっていく響子たちに向かつて

ルイ「響子さん！ 僕、明日で30です！」

響子「(キョトンとして) お、おめでどう」

ルイ「違います！ シズキとの約束！ 30になる瞬間、福岡の、あの海に飛び込むって！」

響子「そっか。彼女と同じことを考えてたら、あつちの世界の私たちに装置を借りる」

ドユン「福岡？ 今からですか？」

ルイ、時計を見る。午後5時。そして細田を懇願するような目で見ると

細田「……どうせヒマだよ」

○福岡空港・滑走路(夜)

飛行機が着陸する。

○タクシー・車内(夜)

慌ててタクシーに飛び乗るルイ、響子、ドユン。

ルイ「二見ヶ浦の海岸まで！ 12時までに着きますか？」

運転手「こげんな時間から！？ 間に合わんやろー」

響子「せっかく来たのに……」

ルイ、少し考えてから挑発するように

ルイ「あんたそれでも九州男児ですか？ あー、情けなか。本物の男はおらんくなつた」

運転手「おい、言うたな！ やっちやるけん」

な。見とれよ！」

○大通り（夜）

福岡の中心街をタクシーが猛スピードで爆走している。

ルイ・響子・ドユンの声「あああああー！」

○二見ヶ浦海岸（夜）

浜辺に大急ぎで駆け込んでくるルイ、響子、ドユン。

ドユンが吐きそうになっている。

ルイ「終わってから吐いてください！」

ドユン「ルイさん怖い」

ドユン、鞆から量子エンタングラーを取り出し、ルイに渡す。装着を始めるルイ。

響子「あと3分！どこからシヅキさんは飛んだ？ 正確に」

ドユン、ノートPCを操作。

エンタングラーの音声 「Initiating brainwave synchronization...」

ルイ、不安そうに海辺を見渡す。

ルイ「確か、あの夫婦岩と鳥居を左から見て……」

エンタングラーの音声 「Biological signal acquisition complete... Beginning brainwave pattern analysis...」

ルイ、沖に見える夫婦岩とその正面の鳥居を指しながら波打際を左側に小走り移動し、岩場へ。その一番突き出した岩の上に立つ。

エンタングラーの音声 「Awaiting connection with second user...」

ルイ「……ここです」

響子「間違いない？」

ルイ「たぶん……」

響子「違ったら、思い出も残らないんだからね？」

ドユン「あと10秒！」

ルイ、大きく息を吐いて

ルイ「ここです、絶対！」

ドユン「シヅキさんのことを強く思って！
3、2、1、はい！」
ルイ、目を閉じて海に飛び込む。突然白
い強烈な光がルイを包む。

○量子空間

ルイが水から顔を出す。裸で胸まで海に
浸かっている。
周囲360度は完全に凧いだ海。空はあ
らゆる方面が鏡面のように反射しあつて
万華鏡のように、無数の三日月と星々が
散らばっている。

ルイが戸惑っていると、背中合わせに水
面からシヅキが現れる。

ルイとシヅキ、向かい合う。少し呆然と
してから歓喜の声で

ルイ・シヅキ「やった！」

シヅキ、微笑みかけると、突然ルイの顔
に水をかける。

ルイ「何だよお」

シヅキ「(不貞腐れたように)勝手に告って
消えるな」

ルイ「……ごめん」

微笑んで見つめ合う2人。

ルイ「……覚えてたんだね」

シヅキ「忘れるわけじゃないじゃん。大切な思い
出だもん」

シヅキ、ふと我に返ったように

シヅキ「え、裸？」

シヅキ、ルイを睨んで水をかける。

ルイ「(戸惑って)いや、俺は知らないよ」

シヅキ、少し笑ってからそつとルイに抱
きつき、目を閉じる。

ルイ、最初は戸惑いつつも、ゆっくりと
両腕でシヅキを包み、強く抱きしめる。

シヅキ「ずーっと前から、こうしたかった」

ルイ「俺も。初めて会った時から」

シヅキ「えー、キモいー」

ルイ「ごめん」

シヅキ「嘘嘘。だけどね、本当は私も最初か

ら、ルイが気になってた」

ルイ「マジで？」

シヅキ「ルイの声が好きだったの。最初の授業でね、ルイが私の前の席に来る前に誰かにぶつかって『すいません』って言った」

ルイ「そうだったけ？」

シヅキ「その声がね、どこか懐かしい気がして、もっと聞いてみたいって思ったの。だからブラウン先生の訳してって頼んだ」

ルイ「やっぱシヅキ英語出来るじゃん！」

シヅキ「ルイのクソシヨボ英語力じゃ私にはかないませんよ。バーカ」

ルイ「うるせーな」

ルイ、シヅキに水をかける。シヅキもかけ返して笑い合う2人。

シヅキ「だけど、そうやってルイの声を聞いているのが心地よかったの。そしたらいつの間にか、ルイのこと、好きになってた」

シヅキ、空を見上げる。

シヅキ「モーニングコールも、わざと負けた。だって、ルイの声で目覚められるなんて、最高じゃん。コーヒーおごるだけで、好きな人と繋がってられるんだもん」

ルイ、涙目でシヅキを見つめる。

ルイ「シヅキ、ごめんね。10年前に、好きって言えなくて」

シヅキ「せーっかくパスあげてたのにー」

ルイ「チキンでごめん」

シヅキ、万華鏡のような星空の天井を見上げて

シヅキ「だけど、ルイがチキンだったおかげで、また会えた。こんな景色が見られた。

それに……私も、怖かったんだ」

シヅキ、ルイの頬に触れながら

シヅキ「どちらかが好きだって言ったら、全部終わっちゃう気がしたから。少しでも長く、この時間よ続けーって祈ってた。こんなにも愛おしい季節の中にいられるなら、いつか不幸になっても構わないぞって」

シヅキ、少し悲しそうな顔をする。

ルイ、そっとシヅキを抱きしめる。
ルイ「世界は、俺たちの優柔不断さに感謝すべきだよ」

笑い合う2人。

シヅキ「バツカみたいな話だよ。猫のせいで宇宙が消えるとか。香織さん、最初マジでヤバい人かと思っただもん」

ルイ「え、そっちの科学者も、響子さんたちじゃないの？」

シヅキ「香織さんと、エマっていう女の子」

ルイ「マジか！ 伝えなきゃ」

シヅキ「あ、香織さんから響子さんに伝言。

『宇宙の果てから愛してる』だって」

ルイ「ロマンチストだなあ」

シヅキ「香織さん、響子さんとまた会うために物理学者になったんだってさ」

ルイ「響子さんも同じこと言ってた」

シヅキ「ヤバいねー、2人。ソウルメイトってやつだねえ」

ルイ、頷いてシヅキを見る。シヅキもルイを見つめる。

ルイ「俺も、宇宙の果てから愛してる」

シヅキ、ルイに水をかけて

シヅキ「やり直し。自分の言葉で」

ルイ、少し考えて

ルイ「10年分、好きだって言いたいけど…
…言葉が足りないから」

ルイ、シヅキにキスをする。シヅキ、それを受け入れ強く抱きしめる。

凪いでいた海に波が立ち始め、星空に流星群が流れる。それらが無数の鏡面の空に反射しあう。そして光の雨のように強い輝きを空の全面に放ちながら、2人を照らす。

ルイ「すげー」

シヅキ「花火みたい」

その幻想的な光景を黙って見ている2人。
ルイ、空を見上げながら

ルイ「俺さ、また何か書いてみるよ」

シヅキ、ルイを見て微笑み

シヅキ「私も、何か撮ってみよっかな」

流星雨がおさまり、空の鏡面の数が徐々に減り始める。

ルイ「これで、終わっちゃうのかな……」

シヅキ「違う。始まりだよ」

シヅキ、掌をルイの掌に重ねて

シヅキ「これから先の世界は、1つの人生を

2人で。表と裏の宇宙から」

ルイ、強く頷く。

シヅキ「ちなみに私が表ね」

ルイ「何で俺が裏なんだよ」

と泣きながら笑う2人。

空の鏡面がどんどん減っていく。

シヅキ、ルイに再び抱きつく。

ルイ「ねえ、シヅキ。また10年後の未来は、

どうなってるかわからない。色んなこと、

起こるかも……不確定性ってやつ？」

シヅキ、ちよつと笑う。

シヅキ「不確実性ね」

ルイ「あー、大事な所で」

ルイ、苦笑して気を取り直し

ルイ「だけど、1つだけ確実なのは、これか

ら先は何があっても大丈夫だったこと。苦

しい時も、嬉しい時も、見えなくなつて、

ずーっと、側にいるから」

シヅキ「(からかうように) それ私の台詞。

私がルイを守ってあげるの」

空は通常世界と同様に、1つの三日月と

星空になる。

笑顔で涙を流す2人、再びキスをする。

ルイとシヅキが強い発光体となり、2人

から発せられた閃光が瞬時に柱のように

空を照射し、そこから無数のカラフルな

光の粒子が広がって空一面を埋め尽くす。

やがて強烈な光が全てを包み込む。

○二見ヶ浦海岸(夜)

岩場の前の水面から飛び出してくるルイ。

ルイ「寒っ！」

啞然とした顔で響子とドユンが見ている。

ルイ、震えて水から上がりながら
ルイ「ど、ど、どのくらい経ちました？」

響子「え？ ……飛び込んで、すぐ上がって
きただけ、だけど」

ルイ「え？」

ドユン「装置も電源が落ちて……」

ルイ、弁解するように

ルイ「シヅキには、ちゃんと会いましたよ！」

響子、怪訝な顔で

響子「……本当に？」

ルイ、思い出したように

ルイ「あ、香織さんから伝言です『宇宙の果
てから愛してる』ですって」

響子、潤んだ目で笑い、星空を見上げる。

響子「そっか………信じてあげるよ」

ルイとドユンも同様に星空を見上げる。

響子「誕生日、おめでとう」

ルイ「ありがとうございます」

○井の頭公園（夜）

ルイが井の頭公園を歩いている。空には
月と木星が浮かんでおり、池の側で立ち
止まってそれを見上げるルイ。

ルイ、スマホケースに挟んだチェキを見
る。世田谷公園で、隣にスペースを空け
てルイ1人で写っている写真。

シヅキの声「流れ星の音、もう聴いた？」

× × ×

シヅキも自分の世界の井の頭公園で星を
見上げ、自分1人が写ったチェキを手
にしている。

ルイの声「まーだ。やっぱ都会はダメだねえ」

シヅキの声「じゃあ今度こそ山奥行こうよ。

競争ね」

× × ×

同時にそれぞれの世界で微笑む2人。

〈了〉

・参考文献

- シェダード・カイド||サラーフ・フェロン(2020)『はじめまして量子力学 ふしぎがいっぱいミクロの世界』、化学同人
- ステン・オデンワールド(2021)『量子論がゼロからわかる 古代ギリシヤの原子論から最新の量子重力理論まで』、ニュートンプレス
- 和田純夫(1998)『シュレディンガーの猫がいっぱい 「多世界解釈」がひらく量子力学の新しい世界観』、河出書房新社
- 和田純夫(1994)『量子力学が語る世界像』、講談社
- コートニー・マルケサーニ(2021)『「繊細さん」の4つの才能』、SBクリエイティブ株式会社
- 竹内薫(2006)『図解入門 よくわかる最新量子論の基本と仕組み』、秀和システム
- 夏梅誠・二間瀬敏史(2005)『図解雑学 よくわかる量子力学』、ナツメ社
- アダム・ハート||デイヴィス著、山崎正浩訳(2017)『創元ビジュアル科学シリーズ2 シュレディンガーの猫 実験でたどる物理学の歴史』、創元社
- デイヴィッド・リンドリイ著、阪本芳久訳(2007)『そして世界に不確定性がもたらされた』、早川書房
- ステイーヴン・W・ホーキング著、林一訳(1995)『ホーキング、宇宙を語る』、早川書房
- 和田光司、『Butter-Fly』・作詞・作曲：千綿偉功、アーティスト：和田光司、アルバム名：『Butter-Fly - Single』、発売年：1999. 脚本内で部分的に引用。
- 大塚愛『さくらんぼ』・作詞・作曲：愛、アーティスト：大塚愛、アルバム名：『LOVE PUNCH』、発売年：2004. 脚本内で部分的に引用。